

東アジアからみた弥生時代

甲元眞之

はじめに

東アジア世界の統一的理解

西嶋定生（1962）「冊封体制論」

→中国周辺諸民族を中国的階層社会への位置づけ＝官爵を与えて君臣関係を結ぶ
官位と官秩 直接支配地＝内臣、朝貢国＝外臣 外臣の官位は1段階下降
強力な統一政権で郡国制支配構造が前提⇔郡県制、周辺地域の社会的成熟

東アジア：楽浪がセンター（出先機関）

楽浪の盛衰：紀元前75年—紀元前後⇔王莽期の社会的混乱と王調の独立

紀元40年—150年前後⇔桓靈の間衰微、黄巾の乱

紀元189年—238年・3世紀中葉⇔晋の内乱・楽浪滅亡313年

公孫氏と魏・晋 とりわけ204年以降の帯方郡設置以降

楽浪滅亡後の「楽浪」を巡る対立＝高句麗⇔百済・倭

冊封体制論は理念型として有効

問題点：中国的観点からの分析・周辺諸国相互の関係を無視

モートン・フリード（1967年）の「文明の中心と周辺」説

古代文明の周辺地域では中心地との相関関係の中で歴史は展開する

中心地：新石器革命→都市国家→専制国家

周辺地：模倣・朝貢→封建制→近代国家

オリエント：アケメネス朝ペルシャ 楔形文字、ゾロアスター教、官僚制度

ローマとオリエントに分裂 1453年以降オスマントルコの統一

中国：春秋後期から戦国初期に専制国家の基本が確立

中華思想の来歴：西周初期→何尊：天命膺受と中心地洛陽

大孟鼎：四方有「受民受土」

政治的都市の形成：民族集団の移住→『春秋左伝』定公4年

琉璃河1193号墓・魯国故城

殷後期：被支配者集団の移住→軍隊組織への組み込みと田獵的威嚇

文明の中心地（専制国家）とその周辺地域では社会の構造と歴史の展開が異なる

弥生時代

縄文土器と土師器との対比→土器型式に基づく時代認識

八幡一郎：弥生式土器文化の時代→弥生式土器が普遍化した時期・水稻栽培

小林行雄：弥生式土器が使われた時代→稲作農耕・金属器・大陸との頻繁な交渉

経済類型による区分：佐原真→食糧生産に基盤を置く社会

灌漑農耕を強調→ウィットフォーゲル 灌漑文明

板付遺跡での発見→弥生時代早期を提唱

問題点：選別的経済類型（沖積地割拠型）と網羅的経済類型（沿岸漁撈民型）

中川の動物死亡季節の分析

水稲栽培が形成された時期から前方後円墳の成立まで

箸墓以前の「大型墳丘墓」の存在 庄内式＝酒津式＝九重式＝西新式土器段階

→石塚「前方後円墳型」墳丘墓：直径 80m の存在

寒冷化現象と集落の集中化：墳丘墓の出現→西日本に共通の現象

弥生時代の年代

小林行雄：鏡と銭貨（貨泉・五銖銭）→紀元前 300 年—紀元後 300 年

杉原荘介：階段状編年 100 年ずらす⇔山内清男の縄紋土器編年

岡崎敬：洛陽焼溝漢墓の編年との対比＝弥生時代中期中葉以降の年代

弥生時代前期は炭素年代→紀元前 5—4 世紀⇔交差年代

国立歴史民俗博物館：AMS 法による年代決定→紀元前 10 世紀から紀元 3 世紀前葉

問題点：炭素 14 の量が歴史的には一定せず→国際較正曲線で補正

炭素 14 の半減期 国際的 5568 年⇔歴博は 5730 年→3%の誤差

先史学的接近法：砂丘・砂堤の形成

寒冷化→海面低下→離水作用→風成作用で砂丘の形成→海面上昇→砂丘の安定化

西日本の沿岸地帯での現象→層位的把握

黒川式→砂丘→夜臼 1 式：縄紋時代と弥生時代

土井ヶ浜 1 様式→砂丘→弥生中期初頭：弥生時代前期と中期

弥生時代後期末葉→砂丘→弥生時代後期終末：弥生時代と【古墳時代】？

＝炭素 14 の増加・木目の幅の狭隘化→世界的現象：先史学資料で確認可能

紀元前 800 年から 700 年、紀元前 350 年から 300 年、紀元後 150 年から 200 年

弥生時代は紀元前 8 世紀から 3 世紀初頭までの約 900 年間

東アジアの初期農耕

家畜飼育を伴う農耕と伴わない農耕

中国：長江流域＝稲と豚

黄河流域＝畑作物中心と豚 龍山文化期→五穀と豚、牛、羊

中国東北部、朝鮮東北部：畑作栽培と豚

朝鮮南部：畑作栽培が卓越→田畑交換方式＝共伴雑草

日本列島：灌漑水稲栽培と湿地での農耕→稲作栽培が卓越

東日本は畑作栽培優越（火山灰台地）→水稲栽培への傾斜

家畜飼育の非効率性

生産性の違い：1 ヘクタール当たりの収穫量（播種量対収穫量）

紀元前後頃のイギリス 500kg→1 対 3

奈良時代の日本 上田 1057.5kg→1 対 12、中田 846.3kg→1 対 10

下田 635kg→1 対 8、下々田 317kg→1 対 4

連作不可能（家畜動物との共存→三圃制）、製粉時の歩留まり、越冬用の株調達
家畜と穀物 蛋白質産出量比（1H） エネルギー産出量（メガカロリー）

酪農 115kg→4.3 倍 2500→3.3 倍

肉牛 27kg→1 750→1

小麦 350kg→13 倍 14000→18 倍

→家畜飼育から狩猟活動への転換：馬橋文化、イタリア、ウクライナ

社会集団：基本的には 20-25 人前後の集団で構成＝狩猟民の集団単位

中国→龍山文化で大きく社会が転換＝大規模集団の形成

朝鮮・日本→単位集団で社会集団が維持

弥生時代：水稻栽培を基盤として家畜飼育を伴わない小規模経営

階層化社会の形成

集団墓から特定個人墓への展開過程

中国文献との対比：百余国と 30 許国→前漢鏡の分布＝紀元前 1 世紀中葉—末葉

→舶載青銅器の分布＝紀元前 3 世紀—2 世紀

弥生時代早期—前期：方形区画墓から列状配置⇔円形配置＝縄紋時代

弥生時代中期：集団墓中に有力者集団の形成＝威信財の排他的保有

弥生時代後期後半：特定個人墓の出現⇔弥生時代は基本的に集団墓

岡村秀典＝中国での年代をあてはめ→洛陽焼溝漢墓の年代とはズレ

甕棺の編年による年代の必要

須玖岡本 D 地点：KIIIb 弥生時代中期中葉紀元前 50 年頃

三雲 1 号甕棺：KIIIc 立岩 10 号甕棺弥生時代中期末葉紀元前後

三雲 2 号甕棺：KIVa 弥生時代後期前葉紀元後 1 世紀前葉

井原鍬溝：紀元 1 世紀末葉

桜馬場：KIVb でも新しい：弥生時代中期中葉紀元 1 世紀末葉

平原：西新式よりも古い 紀元 2 世紀後半—末

吉武高木→空白→須玖岡本→三雲 1・2 号→空白→井原鍬溝→空白→→平原

金印

師升等

倭国王帥升等→『北史』『隋書』『倭国伝』『漢の奴の国なり』

同一地域での首長連続性の欠如＝首長連合（説）→楽浪の盛衰と一致

集団墓の中での優位者は一代限りの不安定な首長層＝累代性の欠如

東アジアの中の弥生時代

寒冷化現象による民族移動：本格的な農耕集団の形成 紀元前 8 世紀—4 世紀末

沖積地に進出＝朝鮮との関係、沿岸部での農耕＝縄紋時代の漁撈民
道具の性別：大陸に系譜＝男性、縄紋に系譜＝女性

例外：田植、織物＝女性→多くの男性と一部の女性の組み合わせ

弥生時代中期（従来の前期末）紀元前3世紀—紀元前後

寒冷化と燕国の勢力拡大政策（紀元前4世紀末—紀元前3世紀）

大陸系青銅器と鉄器の導入＝燕国の勢力拡大に関係する現象

朝鮮における明刀銭と鑄造鉄製品の分布（デポジット）

燕国秦開による軍事行動→2000里を併合（北京から清川江流域）

燕国の勢力拡大に関係する現象⇔細形武器（剣・矛・戈）類の分布

弥生時代中期中頃→楽浪郡の設置：中国系文物導入の本格化

大型鏡→中国的権威の象徴説：一時的な現象

大型鏡と小型鏡の共存：シャーマンのコスチューム

大型鏡＝辟邪、小型鏡＝護心・護頭鏡→副葬品の配置

三雲1号墓＝男性、2号墓＝女性、平原＝女性 須玖岡本も2名の可能性

宗教的指導者と日常的指導者の協同支配体制

金印→返却せず＝中国的支配構造を理解していない⇔冊封体制→権威の更新

漢代のシステム：「列侯は金印紫綬」

『漢書』「百官公卿表」「列侯の食する所の県を国という」

列侯：王朝樹立の功臣＝県程度⇔皇帝親族＝郡程度の封地を分与

『三国志』「?伝」邑落を国として把握

『続漢書』「郡国志」：県・郷、聚・亭 or 城の名前→春秋時代の国名・古邑名

三雲：ガラス璧＝県令クラス、飾金具＝県令クラスにも認められる

律令時代の郡の大きさが中国の県：後漢書→三十許国＝ほぼ律令時代の郡単位

中国的支配構造からみると弥生時代の「倭国」は中国の県クラスとの認識

おわりに

『宣和集古印史』「親魏倭王」印の収録→中国的支配構造を理解？→偽書

卑弥呼と壹与 「親魏倭王」印と新「親魏倭王」印→張政が同行

266年「親晋倭王」印存在の可能性⇔次の時代＝理念としての冊封体制

→3世紀前半期をどのように把握するか 過渡期 or 母胎期

弥生時代＝水稻栽培を基本とする小規模経営の社会

→社会＝王墓でも集団墓から逸脱できない⇔纏向型前方後円墳の存在

社会的には不安定な時代：気候変動による生態環境の変貌と楽浪の盛衰に左右

→北部九州＝伽耶の動静と類似⇔近畿地方の新しい社会の枠組み